夕焼け通信 1358号　2022.6.27
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その2）104

木幡智恵美

二人暮らし（1）

息子が福井に二か月ほどヘルプで行くことに決まる半月ほど前、長男が小田原から御殿場に転勤になった。コロナ禍で、連休にも帰れなかった長男の小田原暮らしは一年とちょっと。事務所として借りていた一軒家に住まわせてもらい、富士山を見ながら通勤するとのことで、一度は行ってみたかった。長男によると、御殿場は静岡県になるけれど、小田原から車で三十分ほどの距離だとのこと。社員寮暮らしになり、富士山噴火の恐怖はあるけれど、自然環境には恵まれているようだ。何より、神戸でお世話になった先輩とまた一緒な勤務先になったというのが心強い。コロナが収まったら、今度こそ御殿場のみならず、小田原にも行ってみたい。

さて、二男が行く福井とは、どんなところだろう。舞鶴と金沢は行ったことがあるけれど、その間に位置する福井に足を踏み入れたことはない。日本海側で、原発があり、コロナ感染者が割と少ない。何だ、島根と似ているではないか。

六月最初の日曜日、朝からあれこれ準備をし、八時前に息子は福井に向かった。私にしてやれるのは、お昼の弁当を作るくらい。二月に義母が亡くなり、心に空いた隙間がふさがらないうちに、また一人家族が居なくなる。朝は息子の食事準備をする必要がない。「今日は何？」帰ってくるなり、夕食メニューを聞く声もなく、作る楽しみも半分以下になってしまった。おかずは減らず、残り物が何日も冷蔵庫に居座っている。夫と二人の夕食時、夫に話しかけられても、返事をする気さえ起こらない。

そんな日々に、活力をくれるのは孫たちだ。迎えを頼まれると、夕食は何にしようかと、三人の孫たちの顔を思い浮かべながら考える。休みの日に、娘が孫たちを連れてやってくると、一日中振り回されながらも、苦には感じない。しゃべり通しの娘が、「寛大は完全に反抗期だわ」と言う。「あんたは、産まれてからずっと反抗期だったがね」と返してやる。その寛大も、実歩も、宗矢までブロックで遊んでいる。今まで、お兄ちゃんやお姉ちゃんが作ったブロックを壊すだけだった宗矢が、ブロックをはめるようになった。そんな些細なことに、心が浮き立ってくる。

がらがら橋日記

宮森健次

ちょこっと就労　2

川沿いのまっすぐな道路はいつしか滑走路となり、力任せに漕ぎに漕いだ。もっとスピードさえ出れば、前を行く怪鳥と巨人の後を追って飛べるはずだ。道がカーブにさしかかり減速をすると、怪鳥と巨人の正体もだんだんと見えてきた。川面を覆った霧の上から工場の屋根と煙突がほどよく霞んで、広げた翼とそれにまたがった人の背中に見えたのだった。

新聞配達の報酬は月に八千円前後だったが、夢のような金額だった。ぼくは、それでLPレコードを買い、文庫本を買った。誰にも気兼ねすることなく千円札を何枚も使えるなんて、まるで魔力だった。だからひょっとしたら空だって飛べるのじゃないかと思ったのだ。そんなことがあるはずないのはよく分かっていたが、学校の行き帰りと新聞配達に通る道、どこかで異界につながっているような気もするその道が世界のすべてだったから、小さな分だけ想像はどこへでも飛んでいった。ちょこっと就労に誘われたとき、すぐにやってみようと思ったのは、小さいけれど新しい世界にまた出合える、という気がしたからなのかもしれない。

仕事は便利屋みたいなものだ。依頼者があって、こちらと条件が合えば出向く。例として挙げられたのは、掃除、洗濯、料理など家事全般をはじめ、病院への付き添いや話し相手など極めて多岐にわたっていた。要は困ったときのお手伝いだ。対価としていくばくかお金を受け取るので、ビジネスとも言えるが、仕事の軽重、難易など関係なしの定額だから、有償ボランティアと言った方がいいのかもしれない。団体が仲介をするので、都合が付かないとか、やりたくない場合は断ればよいということだった。

「おれなんかなあ、自分でやれや、って思ったやつは断わーで。」

と、斡旋してくれた先輩が言うので、なんだ、そぎゃんことでいいかや、と気が楽になった。低額をいいことに自分の楽のために家事を外注する向きも当然あるだろう。まあそれはそれで興味があるので、自分でやれや、と腹立たしくなるような仕事もしてみたいと思った。

初仕事は、実家のご近所だった。独居老人宅で処分のための家具運び出し。これは実家で去年散々やったことである。山となったタオル、紐、紙袋など苦労してかたづけた話をしたら、依頼者の婦人が「わかるー」と手を叩いて笑ってくれた。これまで顔見知り程度だった婦人と一気に距離が縮まった。帰り際、作業代に加えて缶ビールをおまけしてくれた。この仕事、なかなかおもしろい、と思った。

30代フリーター　やあ、ジイさん。朝日新聞が「ビッグテック　膨張する権力」と題したシリーズの1回として、グーグルやメタといった巨大IT企業（ビッグテック）が利用者ひとりひとりから集めた膨大なデータ、いわゆる「ビッグデータ」をもとに個々の利用者の関心の傾向をつかみ、それに応じた広告を個人に狙いを定めて出すシステムを紹介していた（6月15日朝刊）。

年金生活者　フーコーが生きていたら、自らが「生権力」と名づけた権力の純化された姿をそこに見るかもしれない。

30代　フーコーの権力観をおさらいしておくと、彼は近代以前の権力が逆らう者を殺す権力だったのに対し、近代以降の権力は人びとを生かして管理する権力と考え、それを「生権力」と呼んだ。それはふた通りのあらわれ方をする。ひとつはひとりひとりの身体に働きかけ、規律に従うよう訓練する。軍隊や工場や学校での訓練がその典型だ。もうひとつは、統計的なデータなどをもとに集団に働きかけ、人口や健康をコントロールする。

年金　ビッグテックを介してひとりひとりのニーズに合った広告を出すシステムは、生権力のふたつのあらわれ方のうち、個人に対する訓練に該当する。軍隊や工場や学校だと、逆らう者を殺しはしないものの懲罰を与えることによって従わせるので、そこに前近代性の残滓を見ることができる。これに対し、「ターゲティング広告」と呼ばれるビッグテックを介した広告は、そうした懲罰を必要としない。代わりに便利のよさが利用者を進んで従わせるように作用する。

30代　集団に働きかけるほうはどうなんだ。

年金　記事ではふれられていないが、ビッグテックがもたらしたもうひとつの大きな変化はビッグデータの活用によるかつてない精密なマーケティングを可能にしたことだ。新たな需要を創出し、消費の動向を方向づけるその作用は、集団を対象に人口や健康を制御する「生権力」のもうひとつの発現形態に該当する。人口や健康の制御が公衆衛生などの名のもとに、逆らう者を罰する仕組みをともなっているのに対して、ビッグデータによるマーケティングは消費者を自発的に従わせる方法をとる。ここにも生権力の純化を見ることができ、「超生権力」と呼びたい誘惑にかられる。

30代　再犯を防ぐために刑罰の目的を「懲らしめ」から「立ち直り」に転換する刑法改正が成立したのも「生権力」の広がりを示しているように見える。

年金　刑務所を主舞台とした矯正行政はおそらく権力の前近代的な側面が最も多く残っている領域のひとつと推測される。今回の刑法改正は、私たちの社会全体で生権力の支配が強まっていることを示している。

　それをあらわにしたのが新型コロナウイルスだ。マスク着用をはじめひとりひとりを規律に従う従順な存在に仕立てる一方、ワクチン接種の推進で集団全体の健康をコントロールしようとした。

　生権力は私たちを助けてくれるので、進んで従おうという気が起きる。しかし、それによって自由を制約されることもたしかで、ときにはあらがいたくもなる。

　前近代の権力は殺す権力なので、それにあらがうのは命がけとなるが、生権力への反抗にはそこまでの必要はない。それは私たちの日常を拘束する権力なので、日常の動作による反抗が可能となる。

30代　ジイさんも反抗しているのか。

年金　コロナについて言うなら、マスクをできるだけしないとか、検査で陽性と判定されて隔離されることのないように、少しくらい風邪のような症状があっても医療機関にはかからないようにするとか、といったことがある。生権力は生かすことと管理することの両面を持つ権力なので、現実には反抗一辺倒も、また従属一辺倒も不可能と言っていい。私も人混みではマスクを着ける。従属と反抗を自分に最適に塩梅することが肝心なのだと思う。

30代　なぜ生権力の支配が広がったんだ。

年金　「人命第一」の考えが広がったからだ。この考えが規範のように語られるようになったのは、それほど古いことではない。戦時中にまでさかのぼらなくても、団塊の世代の私たちが若かったころは「革命に命をかける」という言い方が奇異には聞こえなかったし、三島由紀夫は命よりも価値のあるものが存在すると強調していた。

　現在は「人命第一」に反する言動はタブーのように排除される。それを言葉だけでなく、実行に移せるだけの経済的な豊かさを私たちの社会が高度経済成長を経て獲得したからだ。

　医師の志望者が増え、医学部が高偏差値化したのは、「人命第一」の考えが社会のすみずみまで行き渡ったことが背景にある。医師は「人命第一」現実化するために欠かせない存在になった。そのことが医師に権力を与えた。典型的な「生権力」だ。

　だが、ヒトは死ぬことによって次の世代を誕生させるようにプログラムされている。そうである以上、だれかを（たとえば家族を）、あるいは何かを（たとえば国家を）生かすために死ぬという考え方は、「人命第一」の社会でも消えることはない。ただし、それはかつてのように社会の「本流」になることはない。

ニュース日記　836

中村　礼治

広がる「生権力」